Osaka University Knowledge Archive

Title	言語文化学 Vol.14　編集後記
Author(s)	山田, 雄三
Citation	大阪大学言語文化学. 2005, 14, p. 231-231
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77921
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

編集後記

4月には言語文化部と言語文化研究科とが統合される予定なので、この第14号で『言語文化学』も節目を迎えたと言っていいかもしれない。研究成果を発表したいという学会員の意欲は年々高まってきており、第14号への投稿希望調査では、過去でももっとも多い41名からの投稿希望があった。実際に投稿があったのは、そのうち27篇で少々、残念な結果だったが、それも自己の研究成果に対する投稿者の批評意識が高まったことと無縁ではないだろう。

査読は厳正に行われていると思う。委員会および執筆者へは、査読者からたいへん丁寧なコメントが届いている。そうした厳正な査読の結果、本号では12篇の論文と3篇の研究ノートを掲載することになった。約2篇に1篇の割合で、採用されたことになる。投稿者にしたらけっして低いハードルではないかもしれない。しかし、委員会としても採用を決めるプロセスに関して、毎年、整備や改善を図っていることは特記しておきたい。本年度もその問題について研究科のスタッフや修了生を中心に懇談会を開いたが、次号からは査読者間の意見調整がより円滑にかつ慎重に行われるような方法が導入されることになる。

最後になったが、本誌の刊行にあたっては、査読者の方々や事務局の助手二人にたいへんお世話になった。とりわけ、事務局の伊賀上さんに多大なご尽力をいただいた。言語文化学会設立時から研究科の助手には事務局の仕事を一手に引き受けてもらってきたが、助手ポスト削減等の流れのなかで、来年度は、その点も大幅に見直さなければならない。言語文化学会も大きな節目を迎えつつある。教員、修了生、院生を含むすべての学会員が本学会の運営にこれまで以上に係わってゆく環境を整備することが、今求められている。

2005年3月

大阪大学言語文化学会委員会（山田雄三）